

新過去帳覺書（其二）

大杉と刺客

中 濱 鐵

三本目のエヤシツブに火を點じた時である。『君！』が至急是非會ひたがつてゐるのですが一寸來てくれませんか？』
今まで獨りだと思つてノウ／＼してゐた僕は突然、耳朶で覺えのあるこの澄み切つた聲を受けたので軽く驚いて振り返る。其處には兼ねて見知り越しの丈高いがN紅顔に微笑を堪えてはゐるが緊張した態度で突つてゐる。餘りに退屈してゐた際なので僕はこの偶然の變化を快く迎へ、軽く大きく點首して早や無意識に腰を浮かす。

數日來、全てのアルジオア新聞は、此度の全國労働組合聯合大會に對しては、嘲笑的に或は揶揄的に又は中傷的な離間策で揣摩憶説の記事を盛り筆を揃へて彼等の所謂貴重なる紙面を惜しげなく埋めてゐる。

而も當來無産労働階級の革命的威力に對する憔悴的恐怖の狀はその字と字、句と句、行と行との間に歴然と讀み獲られる。

此の日、民衆は種々な色彩の好奇に驅られ、憧憬に浸りながらヒシ／＼と公園廣場へ詰め掛けて來る。總有種類の労働者達は各團體旗や組合旗を先頭に押し立て、モットーを掲げた畏旗を適當に配列し、色とり／＼に思想的表徴を染め出した小旗を手／＼手に打ち振り翳し、彼方ではインタナショナルの歌、此方では労働革命歌を高唱しつゝ、隊伍堂々として會場前の空地へ押し寄せ進む。

私服制服變裝の警戒線は廣く細かく共同使所へまでも張られてゐる。

それは、一九二二年八月末日午前九時前後の大阪天王寺公園に於ける公會堂を中心とした四邊の情景である。

全國の各労働組合からは、各々幾人かの代表と其の應援傍聴者として數多の組合員を送つて總聯合の促進を議す可く遠近を問はず聚り馳せ参じたのである。

それにも屈せず労働者は、各自の旗手を取り圍み衛り、労働歌を唱ひ續けながら汗して群つてゐる。數多の急造的變裝者を混へた大衆もこれに和して物々しく充ち満ちて来る。

探訪記者等は圖々しくも眞正面から、尾行達は他所々しく見隠れに、彼等の米櫃である所謂黒表人物の首實檢に忙はしく狐の如く蚤取り眼で狡猾に群から群へ縫つてゐる。

其の時労働雜誌を買つてゐたWが宣傳ビラを撒いたさで檢束されかゝる。一時殆んど官憲の捕虜になつたかの如く見ゆる。僕等の組合の旗手坑天上りのRは旗を僕に押しつけて直ちにその渦中に飛び込む。續いて多くの勇敢な労働者達の敏速な來援でWを窮地から奮還して凱歌を奏ける。この波動が靜まるまで五分、十分、三十分、群衆は興奮を生み、興奮は慄慄を齎らし、やがて其處彼處に渦捲きの動搖めきを見せて来る。

然し、會場は容易に開場す可くも見ぬない。日は愈々輝き、群衆は益々溢れ、時は刻々に逃げ移る。旗頭の鎗は折柄の太陽の直射に煌き閃き文字通り殺氣天を誅してゐる。

会場内では代表者達から更に選出された臨時評議員等に依つて最も重要な當面の問題が検討されつゝあつた。

即ち、押し寄せたこれ等の全ての大衆を傍聴者として——それは到底收容さる可くも見になかつた、又假令收容され得るにしても、その中に紛れ込んでゐる官憲や反動團體の異分子等の爲め直ちに混亂に陥ることは判り切つてゐた——入場を許すか、或は一代表に附幾人宛かの後援傍聴者——これは一方に於て入場者を制限し得ると同時に他方に於ては議事進行中、組合の性質上、代表一人では到底その組合の裁決權の行使を躊躇される場合即刻合議決定するに多大の便宜ある爲め——を許可するか、又は單に代表のみの入場とするかに關して自熱的の論戰が續けられてゐたのだ。

而も、それ等の全ての單位と見做されてゐる代表の選出方法に就いては最初から互に相異なる根本的背景思想の二大色別、所謂集權合同説を主張する労働總同盟派と、自由聯合説を主義とする反總同盟派との間には、到底相容れない巨溝が底深く掘られてゐたのだ。

恰も遠くかのインタフナシヨナルに於ける所謂マルクス派とバクウニシ派との論據にその動因が介在して居るかの如く見受けられた。
 自由聯合派に屬する自由労働者同盟の補缺代表として應援組合員達と共に我等の旗下にゐた僕は、餘りの喧騒と無爲に倦意を覺け群を離れて
 獨り西門近くの樹蔭のベンチに憩つてゐたのである。

「何處だね？N君！」

「直ぐ其處です」

『G、獨りかね』

「否え……」

Nが明かに當惑顔だつたので僕はそれ以上問ふのを止める。二人は並んで黙々ミ歩を運ぶ。

新世界は昨夜の歡樂の披勞から未だ目醒めてゐない。道行く人は極く稀である。而も二人は無意識に四邊に氣を配ることを忘れない。僕は會場のこゝも自分が今歩いてゐるこゝも全く打ち忘れて解し兼ねるが興味あるGのこの突然の面會希望に對して考へ續けてゐる。

Cは僕との友情は多年來續いてゐる。兩人は或る時、或る場所で全く偶然の機會が戀人同志のやうに離れ難いものにしてつた。根本的思想の一致點は當時兩人共××××××××××××××××××××置いてゐることであつたがよしその一致點がなかつたにしても全く氣の合つた同志といふよりも兄弟といふ仲であつたのだ。それほど意氣投合してゐた兩人の信交も僕の我儘な族行癖Gの求めて止まない新しい移り氣さは何時の間にか兩人の思想上にまでも甚しい差違懸隔を生しめた。其の頃からGはEの組織した實行團體に迎へられて今は副首領然として牛耳つてゐるのだ。Nはその結社の書記で兼ねてGの秘書でもある。Gと僕は久しい以前（さうだとも足掛三年にもなる）から逢はないでゐる。然しお互の上には決して惡感を持つてなかつた筈だ。畢竟Gにしる僕にしる同志と自稱してゐる連中にも虫の好かない奴等が多く、又全く異つた思想上の立場に在る連中でもその個々人としては氣持良く實際し得るこゝろ自信を持つ且つその想念を努めて實踐してゐる部類の人間だつたのだ。然しこの自信も想念も全てが正しいものではなかつた事が直ぐ次の事件の中に展開れる。

公園から三町足らず、新世界のこあるカフェーのコック部屋のドアを排してNは僕を導き入れる。家人は未だ寝てゐるらしい僅かに女の子らしい聲が僕等に應じたゞけ――

「だアれ？」

「僕だ！」

Nが答へる。聞き覚えてるさみえる。

『あら、さう——』

直ぐ又もこの静寂に歸る。開業してゐない店の内部はかなりの廣いが雜然として此の種の營業の昨夜の有様が鋭く僕の頭を射る。

閉ざされてる窓硝子には線ミ緋の燃ゆるカーテンが下ろされてゐる。午近い眞夏の光線が反射し交差し烈しい興奮の色を挑發してゐる。

血を吸つた大理石の四角なテーブルの上には宛れも幾つかの圓藤椅子が踊り出しさうに逆立ちしてゐる。昨夜から籠もつてゐる飲食物の悪臭が部屋一杯に漂漲つてゐる。

而もそんなことには夙つくに惚れ切つてゐるかのやうに中央のテーブルを圍んで五人の若者が悠然ミ腰を下ろしてゐる。それにしても未だ店を開けないのに良くこんな所を見つけて借りたものだ。彼等の大膽さミ押し強さには何時もながら感心させられる。一勢に僕に振り向けた彼等の面上には先刻まで冷然ミ默想してゐた沈痛な影がアリ／＼ミ讀まれる。

Eはゐない。Gを中心に左にはHミI右の二人は全く見知らぬ初めての顔である。

『やあ！良く来てくれたね、如何かミ思つてゐた、待つてゐたのだ、久し振りだね。』

Gはやをら起ち上つて何時もの如く愛想のいい笑顔で僕を迎へたが何故だか不安の色が蒼白くその兩眼の底に漂つてゐるのを僕は見通がさない。HもIも平常の冗舌にも似ず微かに僕に笑みかけたに過ぎない。初對面の二人の青年は緊張した態度を些しも崩さない。Gミ僕ミが對向に陣取る様にNが椅子を運んでくれる。

『全く久し振りだ、不變相かい？』

僕は斯う云つて更めて卓上を視る。たつた今、藥の鏝を脱いだらしいシビ屑のついたまゝのシャンペンが十本餘りも未だ手つけずに置かれて在る。空のコップが物欲しさうに彼等の前に配られてゐる。

『君も不變相かい？』

『うん飛び廻つてゐるよ』

然しGは僕の見知らぬ青年を紹介するでもなく又シャンペンを抜かうもしない。この場の奇怪な光景に對する僕の？は益

々募つて行く。だが同時に又冷靜な興味がそれに伴つて湧いて来る。數瞬間、溶け合はない沈黙が七人の上を支配する。やがてGが嚙み締めてゐた唇を音して開く——

『免に角、来てくれて良かった。もう皆入場つたかね？』

『否、僕が来るまでは未だ皆外に居た。』

それを切つ掛けに自烈つたい、樸つたい會話がGミ僕ミの間に續く——

『I君！隨分聚つてゐるやうだが君は今度の會合が旨く纏るミ思つてゐるのかね？』

『旨く往くかも知れん、往かないかも知れん、遣つて見なくちや誰にも解らんさ？』

『それなら君等は成立させやうミして來てゐるのか？、又打つ壊しに來てゐるんかい？』

『これやア面白い！僕だつて組合員の一人ミして遙々やつて來たんだから折角、一つびの力を惜しまないつもりでゐる、誰が高い汽車賃まで拂つて打つ壊しに來るものか。』

『さうかなア？』

『何故？』

『何故つて僕には君等の眞意が判然ミ解らないんだ。』

『如何して？、僕には又君等が今頃此所に陣取つてゐるのが皆目利らないんだ。』

『それは今に判るさ。なアに此所にゐたつて會場の様子は手に探るやうに解つてゐるさ。』

『そんなら何故先刻僕に聞いたんだい？』

Gがさも自信ありさうに云つてのけるのが僕は癪に障つたので斯う上げ足を取る。彼はニヤリミ笑ふ。彼のこつだから斥候や傳令を引つ切りなしに放つてゐるのだらう。さう思ふミ今にもその連絡兵が歸つて來て彼にどんな報告を齎らすだらうかミいふ好奇心が込み上げて來る。又彼等の視た大會觀を居ながらに御相伴出來るのだミクダらない興味にも唆られる。それにしても何故そんな必要があるのか？僕は此の？の扉を破り度いミ思つて追つかけて聞く——

『何だい！僕に要つていふのは？』

Gは明かに觸れて貰ひ度くないものに觸れられたやうに一寸擧めの面をしたが直ぐ打つつけるやうに言ひ放つ——

「君の熱心さは僕も充分知つてゐる。然し、君等が餘り主義に忠實になる爲めに今日の大會も打つ毀しになりはしないかね？、それについて君に相談してみたかつたのだ。餘ッ程考へた擧句のこゝだ。みんなは反對らしかつたが僕は如何しても君にだけ逢つて打ち明けて見たいのだ。それで來て貰つたわけさ。」

「僕の主義主張なんてのが河童の屁みたいなもの位のこゝは君が一番良く知つてゐる筈ぢやないか。それで如何したつてえんかい？」

彼等の十二の目は同時に憂ひ合ふ。一瞬空中に興奮の彼が渦巻く。殊更らに落着きを見せたGが悲痛な聲を擡る――

「T！君今、僕等は如何しても生かして置けぬ奴を一匹持つてゐるのだ！」

「それゝ僕と關係でもあるまいふのか？」

「有る云へば有るし、無い云へば無いやうなものだ。」

「なアんだ、拙らない。人の生命に係ることをそんな不明瞭な意識で話して貰ひ度くない。僕はそんな曖昧な言葉を聞かされる爲めに呼ばれたのかい？、鎌やに僕にからんで來る癖に君は少しも打ち明けやうとはしない、僕はもう澤山だ。これ以上聞き度くないやうな氣がする。」

彼等の心裡は動搖めいてゐる。彼等はGに僕を忙はしく見較べることを續ける。やがてGは四邊を見廻して一息深吸ひ込んでそれを吐き出すやうに直ぐ鋭く強く強い言葉を流す――

「君にはもう判つてゐる。敵手は大杉の奴だ！」

これは面白くなつて來る。會場なんか如何なつてもかまはないといふ氣になつて僕は更めて彼等を視廻す。先刻までGに僕等を等分に凝視めてゐた憎惡に燃ゆる十の目は、今度は十二に増へて僕の鼻柱を睨みつけてゐる。返事次第に依つては君にても同じく容赦はせぬといふ鬼氣を含んでゐる。僕は話と言ふこともなく靜かに尋ねる――

「一體、何奴だい？」

「單簡明さ！、彼奴が可厭にバクウニン氣取つて振舞つてゐるからさ！」

今まで黙りこくつてゐたHが初めて濁聲を吐き出す。

「ほうするミマルクサエンゲルス氣取つてゐる連中も蠢いてゐる譯になるね？」

僕は極て冗談らしく彼に向つて聞いたがHはそれに答へないで見知らぬ鬚面の青年が荒々しく突つ掛つて來るやうに言ふ――

「そんなこゝは如何でもいゝのです。唯、勞働者達は一緒にたかてゐるのだが彼奴がそれを打つ毀さうとこゝしてゐるこゝだけは確かです。それは彼奴が自分の野を満たさうために水を差すのです。それで僕等は彼奴を抹殺せねばならぬのです。」

「大杉が一人で打つ毀すこゝでもいふのかね？」

「いや！彼奴の一派さ。然し僕等は彼奴さえ斃せばそれでいゝのだ！」

初めてIが喙を容れる。

「さうか？、君等は『確』と『打つ毀す』とかいふがそれらしいこゝでも攫んでゐるのかい？」

「解つてゐるぢやないか、彼奴が此頃『勞運』に書いてゐるこゝだつて、又先刻會場に乗込んだ時だつて自由聯合派の中に傲然と混り込んで得々指導したさうぢやないか？」

僕はGのこの無理解無責任な言葉に全く怒つて了つた。

「傳令がさうこゝでも報告して來たのか！」

「なアに誰だつてさう思つてゐるよ！」

「少くとも僕だけはさう思つてないね。そしてそれゝ全く反對な意見を持つてゐるよ。」

「ぢや君は如何思つてゐるんだい？T君！」

「僕は今、言ひ度くない。」

「然し、兎に角、彼奴は生意氣過ぎるよ。いくら威張つたつて今日は會場から歸しはしない。飛んで火にゐる夏の虫だ。強いて歸らうとすれば骨に化るまでのこゝさ。T君！、君は一體、さう思つてゐるんだい！」

Gは鼻息荒く僕に毒氣を吹きかけて執拗く返事を追求する。僕は太杉の身邊に今、刺客が附け狙つてゐることを判乎と感じたそして今言葉の續けるのは無駄だと思ふ。最後の決をして彼等の挑戦に逆襲し宣言した――

「僕の返答は斯うだ！」

君等がそんな馬鹿げた眞似を止すか――或は彼に向ふ前に僕を相手にして戦ふかだ！僕は決して君等の手を彼に觸れさせはしない！」

「何?!、何?!、馬鹿な真似だつて?、諾!、血祭りだ!君を相手にしてやる!、さあ来い!」

僕の直ぐ左隣にゐる先刻から少しも口を利かなかつた最も年若な青年が上衣のポケットに右手を突つ込んだ儘猫のやうに二三尺後に飛び下るゝやがて腰をかぎめてチリ／＼僕に肉迫して来る。その時、僕は突嗟に右隣のNのステッキを掴んでゐたがそれが仕込杖であることは直ぐにも知れた。相手のポケットにブローニングが喰つてゐるのも點首けた。然し相手の熱狂的な此の努力もGを除いた他の四人の爲めに直ぐ取り押へられた。唯、Gのみは、——多分さうだらう氣使かつてゐたが矢張り豫期した通りだつた——いふ悲痛と困憊の態度を強ひて押し隠し、冷く僕を睨んでゐる。僕は最初の豫想通り義理難いが心にもなく誰かに頼まれてこの實行を餘儀なくやらうとしてゐるのを明かに悟つた。同時にその黒幕が誰であるかも利乎と讀めた。僕は當の青年の無禮を責めるよりも彼の態度の眞剣さに眼頭が痛くなるのを覺えた。再び皆が元の席に落着いた時、Gは彼の心裡を僕に掴まれたことを知つて宥怒を訴へる眼差を不明を詫びる口調で辨解する——

「T君?、僕は君にさう出られるに困るのだ。」

「何故?」

「何故つて僕が君を如何するこゝが出来るものか。」

「だつて今この先生は僕を撃たうとしたぢやないか?」

「いや!それは君が理由も言はずに餘りきつぱり否定したからさ。僕等は先刻から君の判断を請ふてゐるぢやないか。君には解つてゐるかも知れないがもつと詳しく思つたゞけの事を僕等にも言つてくれなくちや——」

「判断だつて言ふけれど君は明かに大杉をやつつけるに断言したぢやないか?それで僕は飽くまでも邪魔すると言ふまでのいいや。」

「だからその理由を僕等に熟く説明してくれ給へつて頼んでゐるぢやないか?」

僕はGの立場としては彼等の前で決して言ひ得ない彼の眞の苦衷を察した。そして氣は進まないが少々喋舌なくちや收まるまいと決心した——

「さうだ!、僕が今、馬鹿な真似を云つた理由は斯うだ!、簡単に言へば君等が彼をバラスいふ理由が餘りに片手落ちな妄想だを認めたからだ。何故なら君等が確かに掴んでゐるさういふこゝも、それ大杉が『勞運』に書いたことを根本的に研究し

たのではなく唯皮層を眺めたに過ぎない。解釋の仕様は讀者各人の勝手である。然し手前勝手な想像を逞うして筆者を一蹴し去らうと云ふのは餘り虫が良過ぎる。ましてや現代治下に於ては思想上の問題は決して執筆者の意の儘には公表されてゐない筈だ。

又、今日彼が自由聯合派の群に伍してゐるからつてそれが直ぐ彼が打つ毀しに廻つてゐるさういふ何の證據になるのだ?、妄想も甚しい。

さうなるさ想像も唯恐怖に化るばかりだ。さう云ふ風に考へる連中は色眼鏡に曇らされてゐないのなら明かに立派な色盲患者だ。

君等は今、僕に意見を求めてゐる。僕の見界のを以てすれば斯うだ!、君等は『勞運』を通して彼の眞意を少しも知つちやゐないし、又今日の彼の行爲が如何だつて言ふのだ?

眞に労働者を理解してゐるものならば、愁つか後に隠れて孤鼠々々細工するよりも堂々彼の如く労働者の列に入つて行動する方がどれだけ男らしいか知れやしない。

それから君等は彼をバクウニ氣取つてゐる云つたね?、さうだ!、それには僕も好い意味で全然共鳴する。同感だ!、然しそれが如何した?、そんなら所謂必然的にマルクスやエンゲルス氣取つてゐる奴がある筈だ。それは全體誰々だい?僕はマルキシズムを全然一蹴する譯ではないが彼等がバクウニに刺客を送つた事實に對しては魂臨際反対だ!、如何程、偉大な個性でも、それに依つて、唯一人の力に因つて、労働運動や社會運動が左右され或は喰ひ止められ又は打つ毀されるやうな淺薄なものでない位のことは君等だつて知つてゐる筈だ。それにも係らず君等は彼を抹殺するさういふ。而も當の大杉には僕の知れる限りではそんな舊臭い英雄的支配觀念なんぞは爪の垢ほども見當らない。

早く云へば君等は餘りに彼を知らなさ過ぎる。

僕の意見では主義だの主張だのを云々して戦ふ前に相手の思想をも充分に研究してかゝらないと果して今、自分は正しく何を考へ何をやらうとしてゐるのか迷つちまふんだらうと思ふ。否充分研究したつもりでも人間は利己的になり容易い動物だから飛んだ間違ひを惹き起て容易いものだ。つまり所謂自由聯合派の連中は——尤も僕もその一人だが——始めから打つ毀しにかゝつてゐるさか、それは大杉の指金だなんて反對派は云つてゐるらしいがそれならば何故聯合否合同しやうと野心を起したのだる

僕は殊更に野心を見做す。何故ならば彼等は彼等の意の如く集權的に合同が行はれさうにないから云つてその反對派をクサスのは全く利己的な野暮天の骨頂ぢやないか？よし又大杉が後から指圖してゐることを認めるとして、それならば同時に總同盟側の後にBやYやAやF等がロシア式その儘の集權的合同的の網の糸を操つてゐないか誰か云へやう？、それは水掛論だ。いくら云つた所で切りのないことだ。同時に甚しく労働者を侮辱する云ふものだ。何故なら日本の労働者も雖も、もう彼等に驅使されるほどのそんなに無智でも無能でもない筈だ。君等の云つてゐることはブルジョア新聞の尻馬に乗つてその宣傳の空ッ棒だけ擔いで悦んでゐるやうなものだ。餘り輕はづみな言ひ草だと思はれる。極端に言へばBやYやAやF等自分等の認めてゐる支配慾を満足さす爲めに全く立場の異つてゐる大杉もさうだ定めてかつて其の癖奴等は蔭に隠れて民衆に大杉のみを誤解せぬやうにしてゐるのぢやないかね？、若し奴等が眞に労働者を理解してゐるのだつたら今日だつてさうぢやないか、何も高見の見物をするこゝろはないや、自分等も組合員の一人の氣になつて群に混つて並んで進むだけの熱心さ大膽さを示したつてい筈だ。自分等の卑怯は棚に上げて大杉の素直な勇氣を嫉妬してゐるのださしか見られないぢやないか？

G君！、君が僕に打ち明けてくれた好意に叛くのは本意ないが、僕は以上の理由で飽く迄も君等の行爲を邪魔しなくてはならないのだ。

それは大杉を失くする君等の理由がまるで成り立つてゐないからだ。だから馬鹿々々しい云ふのだ。

最後に云ふ——これは君等の眞の意志から發した動作ではない僕は認める。屹度、或る野心家それも大杉がゐるでは非常に邪魔になつて仕様のない奴等か、又は彼程の勇氣のない卑怯者達の意志が君等の上に作用してゐるのだ僕は思はれてならない。若しさうだまれば今一應熱く考へ直して見た方がいゝ、思ふ。何故なら他人の支配慾に玩弄されるなんて尙更ら馬鹿々々しい躍り方だからだ。其奴等こそ、その黒幕の奴等こそ民衆の風上に置けぬ卑怯な代物だ！、下劣極まる畜生共だ！だから云つて僕は奴等を今直ぐ抹殺する必要を認めない。寧ろ黙殺してやる。何故ならそんな奴等は遍かれ速かれ屹度獨りで消えて亡んぢまふに信じてゐるから。其奴等が誰であるか僕が云はなくとももう君等の胸に痛いまでに刻み込まれてゐる筈だ。そんな義理が有るか僕は知らないが一人の生命を如何しやうの斯うしやうの云ふのだつたら今少し身自ら判乎とした理由を持たねば嘘だと思ふ。此度の大會は單に一つの氣運なんだ。それが成立すれば熱してゐるのだ云へるし、袈裂すれば未だ氣運が熱してゐなかつたのだと思ふより他はない。勿論それには種々の原因が混紛がるであらう。然し、それが唯一人の力で如何

するの斯うするの云ふことが出来ものか。社會運動に國家主義的觀念は大禁物だ。ナポレオン三世に欺まされなかつた社會主義者や労働者達が、それこそ二十世紀の今頃になつてナポレオン一世に頭を下けるでも云ふのか？沙汰の限りだ！馬鹿々々しい！、大杉が亡くなればそれでアナキズムが消えちまふなんて思つたらそれこそ迂愚だ？、若し君等が否彼奴等がさうだと思ひ込んでゐるのならそれこそ偉大な彼大杉の個性を抹殺しやうとする前に、もう少し詳しく彼を研究してかゝることだ！」

僕は何時の間にかお喋舌になつてゐる自分を差控へやうと思ひつゝ、も、こんなに長く喋舌つて了ふ。みんなは明かに當惑の色を浮べ黙りこくつて顔を見合せる。やがて重苦しさうに息づいて、もたけたGの顔には鼻が大杉暗殺を宣言した時の鬱憂の陰影は拭ひ去られ、生き／＼と明るく甦つてゐる。僕は僕のお喋舌の無駄でなかつたことを心から悦ぶ。彼は云ふ——

『誰にも頼まれやしない、他人から頼まれてやられるやうな仕事ではない。が、君の云ふのも確かに一理ある。矢ッ張り君に逢つて良かった。それから先刻のドサクサ紛れですつかり忘れてゐた、兩君に紹介する。此方がJ君、其此がM君、みんな僕の仲間だ。前途有爲の青年だ。兩君はもう知つてゐる筈だ。僕の親友のT君だ。お互に氣を悪くせず僕同様に交際してくれ給へ。』

さあ！シャンペンにしよう。それにしても大分向ふから便りがいいね。もうあれから四十分餘りにもなる。何か起つたんぢやないかな？

M君！、一杯引つけて見に行つてくれ給へ。そうして此方の形勢は斯うなんだから——解つてゐるね？晝食の時に悠乎談し合ふことにして——

シユウ／＼／＼シャンペンが泡を吹く。分配される。カチリ、／＼／＼、乾杯する。又配られる。

僕は髯面の餘程ふけて見えるJが未だやつ三十三の労働者上りであること、又先刻僕に決闘を挑んで來たMが未だ二十には二つも缺けてゐる學生上りであることを聞かされて、その熱情を頼もしく思つた。シャンペンは切りに泡を吹く。

Nは直ぐ出て行く。部屋の大時計がひだるさうに十一時の頭をブーンと告げる。家の人達も漸く起きるらしい。子供が吐られてゐる。

唇をしめしてGが決心の口を開く——

『I君如何たい？、今直ぐ大杉に會つて見たいのだが呼んでくれる譯には行くまいか？』

『さうか、會つて見るのには僕も大賛成だが今直ぐつて無理だよ。彼だつてまさか大阪くんだりまで遊山に來たのでもあるまいから。』

然し君等の用件も彼にまつては一寸重大問題だから——彼のこつだ或は面白い逢つてみやうと言ふかも知れん。兎に角、交渉して見やう。』

『うん、さうしてくれ給へ。此所で惡かつたら何處でもかまはぬ、彼の都合のい、所にしやう。然し、此所も起きたやうだから何か出来るだらう。一緒に晝食をしながら談すこにしたら如何だらう？、兎に角、聞いてみてくれ給へ。迷惑かけるね御苦勞だが——。』

『待つて給へ。』

險呑なこつだつた。危く盲目蛇に咬みつかれる所だつた。然し、もう大丈夫だらうがそれにしても刺客が大杉の身近く附け狙つてゐることは確かだ。僕の知つてゐる連中が知らし、いや餘り他人に知られてない新顔だらう。見たいもんだ。Nが先に行つたからもう中止させたかも知れぬ——

僕は斯う考へながら急ぐ。

會場は開かれてゐたが大會は未だ始まつてはゐない。群衆は待ち切れずに雪崩れ込んだのだ。外の空地には未だ大部分の民衆が残つてゐるのに場内は一杯で窓枠にまで溢れてゐる。外からの熱心な連中は鈴なりに窓から覗いてゐる。而白い現象だ。僕は私に微笑む。胸に白や赤の薔薇を附けてゐる委員達は場内整理に忙殺されてゐる。代表以外、傍聴者は全く階上に押し上げやう云ふのだ。

西の階段昇降口でバツタリNに出遭ふ。

『大杉は今、何處にゐるの？』

『先刻まで下の後の方に陣取つてゐたやうですが今は東側の二階にゐるらしいです。』

『さうして君はもう仲間に會つたかね？』

『仲間つて？』

『大杉の近所に一人や二人はくつついてゐるんだらう？ふふふ』

『I君にか、つちやさうも——實は今見えないから搜してゐるんです。』

『さうれ見ろ？、早く見つけて伴れて行くこつだね。僕も直ぐ後から往くこになつてゐるから又彼方で會はう。』

『え、では又——』

兩人はニタリニ笑み交して別れる。

僕は東の階段を上る。階上も一杯だ。西と東に各々所謂反對派が相對峙してゐる。切りに彌次を飛ばしてゐる。西側の窓際にはAやFやYやS等の御大連が各々夫人携帶で陣取つてゐる。正面には女工らしい婦人の一團も見える。が殆んど三分の一は其の筋の連中であらう。

二三間先から都合よくWが僕を見つけて近寄つて來る。僕は突差に考へる——Wから大杉に通じた方がいゝ。彼を下の共同便所へ伴ふ。バタ／＼／＼二三人後から下りて來る。が流石に僕等の近くへは來得ない。二間ばかり離れて、見張つてゐるのだが兩人は平氣で話し會ふ——

『何處へ雲隠れしたんだい？、みんなはやられたんぢやないかつて心配してたのだ。』

『なアに一寸變つた面白いものに引つ掛つてそれで暇取つたんさ。』

『變つた面白いものつて？』

『矢ッ張り人間なだけでさ少々おつかないんだよ。すんでのこその盲目蛇に咬みつかれるこつたつたんだ。』

『何だい一體？』

『或る男が大杉に至急會ひ度いつて言つてゐるんだ。』

『誰だい？、今頃にさ？』

僕は要領を掻い抓んで話す。Wは始終を聞取つて眼鏡越しにニヤリニ笑ふ。

『さうかい？、彼奴等のやりさうな幕だ。然しその芝居が打つ毀れるのは痛快だね。西側の御大連、嘸お待ち兼ねのこつたらうに。さうだ？さう云へば犬にしては少々型の違つた變な若造がウロ／＼してたつけ。何にしても抛つこく譯には行かんね』

一寸行つて僕が代つて杉を寄越さう。何代も四邊がウルサイんだからね。」
彼は初めは氣輕く漸々力強く眞剣になつて斯う云つた。

Wが階段を上るに又バタ／＼影の如く彼の後を追ふ可厭な足音が聞えて来る。
二分、三分、五分、僕の周圍にも犬が附いたり離れたりする。然し、いくら四ツ足でも便所の臭い石段の上には僕のように永く突つ立つてゐる熱心さが無い。彼等は遠見を張つてゐる。

輕装した大杉が裕々とした足調で下りて来る直ぐ後からバタ／＼／＼。最後の階段でそれ等の音が止まる。
兩人は臭い石段の上で股を擴けたまゝ、私やかに話し續ける――

「聞いた。面黒いね。やらせて見やうぢやないか？其奴等に――。」

「うん！もうやる意志はないね。然し逢ふかい？」

「逢はなきゃ如何するつていつてゐるんだい？、まあ抛つてゐてやらして見るん！ね。」

「如何も斯うもないさ。もう氣抜けしてゐるらしいが、まあ、氣を附けてゐるが、いい。」

「此方はこれから面白くなるんだから外すわけには行かんさ。抛つてくより仕方ないね。」

「それでは何時會ふ？」

「どうせ東京に歸つてからのことさ。多分今晚歸るこゝになるだらう。」

「會の方は如何なつてゐるんだい？」

「未だゴタ／＼中さ。然し、もう晝の中休みになるだらう。午後だつて三ツ目か、四ツ目で行き詰まりだね。君も飛んだ代物を背負込んだね。まあい、や、組合の方は連中が旨くやつてゐるらしいから。それにしても早く来いよ。一緒に晝食にしよう。」

「兎に角、未だ氣を附けたがい、。」

「あ、有難う。覺悟は何時でも仕まかなきゃア、ひつひひひ……」

「ぢや、往つて来るア、飛んだ御注進だ！はつはは……」

「御苦勞！、不變相多忙屋だなアひつひひ……」

彼はこの會議に對して熱心である。而も此の大會の不成立は見通してゐる。然し、決して、労働者達を無能視してゐる。ない。

さうして今刺客に襲はれても覺悟は出来てゐるさういふ。

僕の豫想は少しも外れない。彼は大會中、面會を拒絶したが歸京後なら何時でも會見しようと言ふ。

「僕は會場の人混みに潜つて再び旨く尾行をマク算段をせねばならない。」

「暇な時つて一體何時なんだい？」

「歸京後だつたら何時でも會つて悠乎話さうつて。」

「さうかい？矢ッ張り今日は駄目かなア――。」

「今日でなくつたつてい、筈ぢやないか？此の問題は慎重に君自身、底深く割つて、も一度熱く考へて見た方が僕はい、と思ふよ。それからでも遅くはない筈だ。やらうと思へば何時だつてやれる仕事ぢやないか？」

「僕もさうは思つてゐるが――。」

「それでい、ぢやないか？」

「うん、然し――。」

「然し？何んだい？」

「いや、何。君はNに逢ふなかつたかい？會場で？」

「遭つたよ。あれから未だ歸つて来ないのかい？」

「うん、兎に角、君には今日は随分迷惑を掛けだね。君等の組合が困りやしなかつたかなア？」

「なアに僕一人位ゐないたつて旨く行つてゐるよ。」

「さうか。今出来るだらうから一緒に晝食しやう。」

僕はすつかりい、氣持になつたのでGの招待を快く受ける。其の時Nが飛び込んで来る。

「如何した？如何した？解散？」

「いや、一時間休憩だ！」

「そして、彼等は？」

『話して置いた。今に來るだらう。』

刺客として派遣されて連中がどんな男かそれも見たかつたが會議が午後續行されるまなれば僕は組合の方の打ち合せをしなければならぬので一刻も安閑してはゐられない。

Gが止めるのを強ひて斷つてに飛び出した。此の行動は後に僕に悔ひを残した。も些しのGの氣持を察して、彼の心裡が完全に落着くまで、面倒でも彼の傍に居てやれば良かったのだ。それは後に判る。

會場から吐き出された勞働者達は、北に南に、赤潮と黒潮との干潮の如く大きな二流れに別れてウネリ始めてゐる。僕も何時の間にか南の渦の中に捲き込まれて流れて行く。百碼ばかり先に大杉の後頭部が人波に揉まれて見え隠れする。而も悠々ミ流れてゐる。

阿部野橋協の交番は此の黒潮の第一の瀬であつた。拾本餘りの節太の腕が無理矢理に僕を鷲攫する。僕は網に掛かつた鰯の如く生捕られる。裏の物置部屋に引つ張り込む。

其處には僕より先にKが寝轉んでゐた。此の日、僕等兩人が大阪特高課の最初の獲物であつたらしい。午前的大會は少しも見なかつた。午後は蒸暑い地下室の留置場。僕は一體大阪に何をしに來たのだらう？

戎署で一夜を過ぎたKと僕は、自動車で玉造署に廻送されて又一夜を明かした。九月二日の所謂日没時に大阪府下即時退去を條件として檢束を解かれたが、それは決して眞の自由になり得たのではない。嚴めしい石門の脇には各二人宛の尾行が、脛を擦つて彼等の厄介な荷物を停車場へ運ぶ可く待ち構へてゐる。

僅か三日の間ではあつたが、月が更つたと同時に、種々な命運の黒い翼が人々の頭上に羽搏き落ちてゐるのを知つた。

先づ、あの時始めて逢つた髯面のJは議案に對する賛否の聲が喧騒を極めてゐる最中に、同じ立場に在つた筈の集權合同派の代表の賛成演説に憤慨し抗議す可く喋を卓上に抛け飛ばして水差しやコップを破壊し、壇上を滅茶々に荒し、爲めに午後的大會は混亂に陥り、遂に解散を命ぜられ彼は其場で捕へられた。

又、あれ程、大杉抹殺に奔走してゐたGは、解散後通行を遮斷した警官隊に、仕込杖を抜いて切り込んだ。彼も亦其の場で捕へられた。Gのこの餘憤の勃發は、僕が強ひて彼と袂を別つた時、既にその兆候は根強く潜在してゐたのだ。

かくして、全國勞働組合總聯合大會は、慣れにも僕の豫想通り痛ましい結末を告げたのだ。

惟ふに此の決裂の直接原因は、Jの投じた磔一つの如く見ゆるがそれは義理堅い彼の素直さを表現したまでのことで、其の根本的動因は、GやJの背後に支配權力の大綱を操つてゐた覆面の怪物共の方寸に在つたのだ。自由聯合派は決して打つ毀しを企みはしなかつた。ましてや、大杉個人が打つ毀しを企圖しなかつたことは勿論である。

僕は此の決裂を哀しむよりも、偶然、僕のみが經驗し得た尊い或物を掴み獲たことを寧ろ獨り私かに悦んだ。同時に運動に對する大杉の眞摯大膽、細心、勇敢さ、Gやその仲間達の青年に缺ぐ可からざる革命的熱情の眞劍、素直さを惟はないではゐられなかつた。

Gの收監を知つた僕は、名古屋から再び引き換して彼を未決に訪ねた。彼の係檢事にも會つて彼に對する異見を論争した。彼の公判にも臨んだ。さうして既決下獄後、遠く他の刑務所に彼を慰問した。彼は些しも大杉のこゝを口には出さなかつたが熱心にアナキズムを研究してゐる云つてゐた。極寒を挾んだ半年の刑期を終へたGが、歸京後その同志等と相携へて眞ッ先に訪ねたのは、大杉であつた。兩者の間は最初の面談で充分相互に理解し合つたやうだ。かくして彼等の信交は大杉が最後の日まで繼續してゐた筈である。

然うだ!!

誰でも面々向つて大杉と談じてみたら屹度彼が好きにならないではゐられなかつたらう!

彼の該博な智識、彼の素直な態度、彼の果敢な行動、加ふるに何よりも尊い民衆を、勞働者を理解し切つてゐる彼等に對する相互の深愛。

惜しかつた! 口惜しかつた! 大天災の下サクサ紛れに専横無智な軍閥の亞流連れに、欺し撃ちされた彼は、餘りにも尊過ぎる犠牲である。

然し、決斷の好かつた彼、太ッ腹だつた彼、又當來の命運を信じて些しも疑はなかつた彼は、自己の生命をさへ奪ひ去つた

傀儡師達に對しても、何等恨むこともなく冷やかに地獄の底に微笑してゐるこゝだらう？

僕は今、彼を中心として捲き起された往時の生々しい血みぎろの種々の形相を、此の獨房の灰色の壁に面して繰り掛け、ジツミ凝視めてゐる。

彼の愛嬌ある吃音^{きんご}と笑聲、

彼の底深い不屈の眼光^{がんこう}に接してゐる。

果然！フィルムは大映しに化る――

彼の運動上の女房役で、此の早春、市ヶ谷の獄舎に吐血して彼の跡を追ふた源次郎村木が、何時も變らぬ力強い沈黙に限り

ない優情をその蒼白い双頬に浮べて現れる。

又、村木と殆んど日を前後して、巢鴨の獄裡に自ら縊つた僕の旅友、酒友、詩友であつた謙太郎後藤の前後數回に渉る入獄の所産、牢人色の歪んだ顔面に物凄く黒い笑みが漂ふ。

スクリーンは廻る――

その不撓の信念に於て、その至烈な熱情に於て、革命的權化とも見られた僕の誓友、平兵衛高尾が社會戰線に斃れた刹那の尊い閃光が今鋭く僕の頭を射る。

最後に無限の悲哀と法悦とを抱いて、輕井澤へ死の旅に上る前日、虛無の消極を嘆きその積極を羨み、遂に僕と袂を別つた永遠の知己、武郎有島の深切懇篤な愛の泉が今、滾々と僕の胸に湧き滿ち沸き迸る。

何と云ふ沈痛な快感だ！

何と云ふ深刻な舞踏だ！

彼等は決して死人ではゐない！

彼等は決して亡びはしない！

今尚、遠地近地に活躍してゐる！

今後は愈々廣く益々深く力闘することであらう！

噫！

大杉は決して亡んではゐないのだ！

三年前の今月今夜を追想して

――一九二五八三一――

附記

一、これは「僕の自叙傳」の一節だ。而も大杉も半面の實寫だ。殘る彼の半面は、この姉妹篇として「逗子の大杉」が本誌二號「大杉榮追悼號」紙上に既に發表されてゐる。併せて判讀し得るれば幸である。

二、この中に現れる人物は大杉を除く他、悉く實在現存の人々である。迷惑を蒙る者があるにしても僕は些しも構はない。何故なら彼等は當時（今尚）主義主張を楯に各自の身を隠してゐるに反し僕は思想の捕虜となることを肯せず自身を充分に愛護し得るから。故に僕は唯當時の主觀に依る眞實を努めて赤裸々に記したまでのことである。

三、逝ける有島、高尾、後藤、村木の四君も亦「僕の自叙傳」裡に重要な役割を演じてくれる人達なので、この機會を借り、併せて此處に掲げ同志諸君と共に深く弔意を表する所以である。

付記

この外に新過去帳覺書の

(一) 菊を喰ふた渠（斷想）

(二) 不死鳥跳躍（所感）

が加藤一夫君の原始――十二月號――に出てゐる併讀を乞ふ。